

# 校長室通信

令和8年1月13日号  
志免町立志免西小学校  
高良 祐治

後期後半が始まり、雪がちらつくとても寒い日があるかと思えば、春を思わせるようなポカポカ陽気の日もあって、寒暖差に体が追いつきません。昨年は、インフルエンザによる学級閉鎖を複数の学級で実施せざるを得ませんでしたが、今年に入ってインフルエンザB型が少しずつ流行り始めているようです。インフルエンザに罹患すると、約1週間は学校を欠席しなくてははいけません。言い尽くされたことかもしれませんが、手洗いやうがい、十分な栄養と睡眠と適度な運動で健康を維持し、毎日の学校生活を充実させてほしいと思います。

## 拭くから磨くへ

本校の掃除時間は13:45から13:55の10分間です。本当は20分くらい時間をとって、じっくりと掃除に取り組んでほしいのですが、授業時間や下校時刻のことを考慮すると、どうしても10分間しか時間は取れません。

昼休みが終わると、子どもたちは自分の掃除場所に向かい、準備に取り掛かります。そして掃除場所を見渡して、「今日はここを特にきれいにしよう。」というめあてを一人一人が決めて、各々がそうじに取り組めます。

子どもたちの掃除場所は、各学級で時々変更しているようですが、掃除場所が変わるまでの一定期間、毎日同じ場所を掃除します。すると、決められた範囲を10分かけて一通り掃除して終わらせる子どもたちと、毎日同じ場所を掃除しているからこそ、気になる箇所ができて、必死にきれいにしようとする取り組みをしているような子どもたちに分かれてきます。

例えば廊下の掃除を例に紹介すると、前者の子どもたちは、ほうきで自分の掃除範囲を一通り掃いてごみを集めたり、雑巾で一通り拭いたりしています。

後者の子どもたちは、両ひざをつき、四つん這いになって気になる箇所を雑巾でごしごししています。その目はとても真剣です。

前者の子どもたちの掃除でも、ごみは無くなり、きれいになっているので、十分なのかもしれません。一方で、後者のような掃除では、一部分しかきれいにならないので不十分なのかもしれません。

しかし、掃除というものに取り組む姿勢や「もっときれいにしたい」という思いは、後者の子どもたちのほうが強いでしょうし、きっと学年や掃除場所が変わってもこのそうじに取り組む姿は継続していくのだと思います。

## 掃除は文化

この10分間の掃除は、学校の教育活動の一環として行っていますが、学校教育における掃除は明治維新後に学校制度が始まった時から行われてきました。子どもたちによる掃除そのものは、それより前の寺子屋の時代から行われているものであり、武道や華道など「場を清める」ことを大切にする考え方や仏教で大切にされている「作務」の一つとして行われていたところから始まっているようです。

『『学校教育の一環としての掃除』を行っているのは日本ぐらいだ』とよく言われますが、子どもがそうじを行っている国は、世界の約34%だそうです。その他の国は、掃除は教育ではなく、「作業や職業」であり、専門の労働者に任せ、子どもは学業に専念させるべきだという考え方です。

掃除に対する考え方はいろいろあるのですが、私は、自分が使わせていただいている学校は、自分で整えることは基本だと思います。校舎や施設は、時がたてば当然古くなっていきますが、「古い＝汚い」ではありません。「私の母校志免西小学校」をいつもきれいに整え、次の学年に引き継いでいく責任感や、汚れを落としながら育つ学校への感謝の気持ちや、日頃の自分の生活を振り返る自省の気持ち、友だちと協力しながら、見たくないものに向き合って改善していく達成感など、掃除には学ぶものがたくさんあると思います。

エジプトやシンガポールなど、いくつかの国は、それまで清掃員を雇用して子どもが帰った後に清掃作業を行うシステムでしたが、日本の「掃除時間」を参考に、学校教育の中に掃除を取り入れました。

子どもたちにとっての第二の我が家である西小を、一人一人が磨き上げ、大切に思ってもらいたいと思っています。